

# 社会部会

司会者 田村 貴史 (旭川市立陵雲小学校主幹教諭)  
助言者 秋元 秀夫 (旭川市教育委員会指導主事)  
坂井 誠亮 (北海道教育大学旭川校教授)

## I 授業の部会から ※主なものを抜粋

### 「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、学びを深める単元構成について

- 本時で前時までの既習事項を活用しながら、学びを深める児童の姿が見られた。本時の前半では、自分たちが調べた室町文化に関する知識を用いて「東求堂同仁齋に国宝の価値があるかどうか」について議論し、新たな視点として提示された「一銭一服」の資料によって「庶民にも文化が広がっていったこと」に気付くことができていた。
- 茶室で行われていた「茶の湯」の文化が、商売として成り立つようになり庶民の生活に根付いていったことを読み取ることができていた。空間的及び関係的な視点を働かせることをねらった授業者の意図がよく分かる授業であった。
- 学習問題づくりから、事実追究、意味追究、さらに次時の一般化の授業まで丁寧に構成されている。学習内容に応じて、問いや学習活動の変化はあるが、単元の構成の仕方として非常にまとまった提案であった。
- 「社会的事象の見方・考え方」を単元を通してどのように働かせていくのかが分かった。本時では「東求堂同仁齋」と「町で商人が茶を売っている様子」を関係づけて「空間的な視点」を働かせていた。児童に着目させたいことを教師が押さえておくことが重要だと感じた。
- 単元を通して、子供たちが室町文化の特色を理解している様子を感じられた。文化の学習は、よさを実感させることに難しさがあるが、今回の実践において特に留意したことは？  
→カリキュラムマネジメントの視点で単元を構成した。総合的な学習の時間「日本と外国の文化を味わおう」と並行して授業を進め、「茶の湯」「水墨画」等の文化を体験する時間を設定した。

社会科部会

### 子供たちの中に問いを生み出す教材化・資料提示の工夫について

- 学びを深める場面で「東求堂同仁齋」を用いたことは、「文化の広がり」を捉える手段として有効な手立てだと感じた。「東求堂同仁齋には国宝の価値がない」と判断した児童の意見を授業終盤まで丁寧に扱い、学びの深まりが学級全体として実感できていた。
- 新たな資料として扱った「一服一銭」の資料、それだけでは解決につながらず補足資料として扱った「町で茶を飲む庶民」の資料が児童の学びを深める上で大変効果的であった。
- 授業で扱った資料に授業者の意図を感じた。『洛中洛外図屏風』から「町で茶を飲む庶民」に要点化した資料を扱ったが、焦点化せずに全体から「町で茶を飲む庶民」を探させることで、庶民の生活に根付いたことを実感させることができると感じた。
- 「一服一銭」の資料からは買い手の様子は読み取れないので、「町で茶を飲む庶民」だけを扱った方が子供たちにとっては分かりやすかったように感じた。

### その他・授業の感想

- 子供たちが課題に対してじっくり考える時間を確保しているのが印象的であった。学習のまとめを書く時間に無理がなく、学びの成果を振り返る時間として十分に機能していた。
- 学習問題に立ち返る時間を繰り返し設けることで、課題を解決する意識が働いていた。
- 学習のまとめを自分で書く前に学級でキーワードを考える場面で、ほとんどの児童がキーワードを考えることができていた。社会科で使う言語感覚が適切に身に付いていると感じた。

## II 助言者からの講評 ※要点のみ

### (1) 秋元 秀夫 指導主事から

平成32年度からの新学習指導要領全面実施を見据えた授業づくりが行われていた。本実践に関わって2点話したい。

1点目は、単元構成についてである。1単位時間に明確な意図をもって単元が構成され、今日の授業も単元の中の1時間として、明確な意図をもつ授業であった。授業の前半部分では、東求堂同仁斎の価値について議論する場面で、子供たちは「物」に着目していた。授業の後半部分では、新たな資料が提示され「人間の営み」にも着目していた。ここに「物だけが受けつがれてきたのではなく、人間の営みによって受けつがれてきたことに気付かせる」という教師の意図が見えた。本実践でも重視された「社会的事象の見方・考え方」について、前文部科学省初等中等視学官・澤井陽介氏は、「初等教育資料3月号」で次のように述べている。

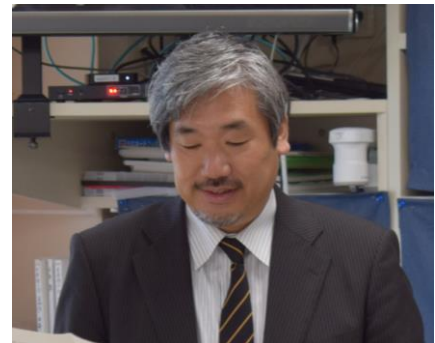


今回の新学習指導要領改訂において、「社会的事象の見方・考え方」と名称を定めたのは、社会的事象、つまり人間が関与している物事、出来事をどのように捉えてどのように解釈するか。人間の働きが社会的事象そのものなので、社会的事象、つまり人間の営み、働きに対する見方・考え方として捉えることを重視したからである。

2点目は、資料提示についてである。本時の課題と「一服一銭」の資料のずれを感じた。子供たちは、唐突に「茶の湯」の資料が提示されたように感じたのではないだろうか。ただ、単元全体を考えると、学びを深める上で有効な資料である。例えば、室町文化について学習してきたことを「茶の湯の発展」という視点で深めるということを押さえた上で、本時の課題を「なぜ、茶の湯は今日の生活に引き継がれているのだろうか。」とするとよかったのではないだろうか。

### (2) 坂井 誠亮 教授から

本実践において1時間目から子供たちの様子を見てみると、子供たちの主体的に学ぶ姿勢が印象的であった。主体的な学びを生む出す要素として、①学習問題の設定、②個の学び、③集団での学びがあると考えている。本実践は学習内容に応じて意図的に単元が構成され、主体的な学びができる環境が整えられていた。



学習問題づくりにおいては、室町文化の写真を見比べて、それぞれの文化の印象を共有し合う段階で、児童の中から「今も室町文化は残っているのでは？」という発言が出てきた。こうした子供たちの問いを基に学習問題を設定したことで、次時への追究意識が生まれた。また、授業の終末に繰り返し学習問題について考えさせたことは、問題解決の意識を持続させる手立てとして有効であった。

学習問題設定後、各自が課題をもって室町文化について調べる「個の追究」の時間を確保したことも今後の社会化の授業づくりにおいて非常に参考になるのではないだろうか。子供たちは教科書や資料集、書籍等を活用して、室町文化についての学びを深めていた。

本時では、調べ学習で学んだことを生かしながら、室町文化の価値について考えた。子供たちの「書院造がなかったら、今の文化はなかったのではないか。」「どちらかというところこれまでの文化は武士や貴族の文化という気がする。」「人口のほとんどが庶民だから、庶民が茶を飲むようになったからこそ室町の文化が広がった。」といった発言から分かるように、既習事項や自分たちの経験、周りの意見を基に自分の考えを作り上げていることが分かる。だからこそ集団で学ぶことが大切なのであって、本実践はそういった意味でも非常に提案性のあるものであった。